

第6節 まとめ

最後に、この章で見てきたことをまとめてみよう。

● 家庭での学習と関連して

(1) 勉強時間は、小学5年生では「1時間～1時間半」がもっとも多く39.6%であった。また、68.1%、約7割の児童の学習時間は2時間未満であった。中学2年生になると、勉強時間はがぜん多くなる。もっとも回答が多かったのは小学5年生と同じ「1時間～1時間半」で36.0%だが、次に多かったのは「2時間～2時間半」の31.1%であった。高校2年生では、「3時間以上」が17.8%と中学生よりも増える反面、「ほとんどしない」も16.8%と増える。高校2年生では勉強する生徒としない生徒とに大きく分化する。

(2) 中学生では、運動部への積極的な参加が勉強時間をそれほど圧迫してはいない。彼(女)らは運動部に入ってもしっかりと勉強している。

(3) 中学生の46.8%、およそ半数が週に半分以上は勉強している。しかしながら「ほとんど勉強しない(17.1%)」や「1日くらいしかしない(8.9%)」と答えた生徒も合計で26.0%もある。中学生は勉強する生徒はするがしない生徒はしない。また、中学生の39.8%が定期考査前に10日以上試験勉強をしている。これは、高校生の27.3%より10ポイント以上も高くなっている。成績別では、成績上位者のほうが試験勉強の日数が長くなっている。

(4) 勉強部屋の有無は学年ごとに大きく異なる。小学5年生では自分一人の勉強部屋を持っている児童は35.6%、中学2年生では62.7%、高校2年生では74.4%であった。勉強部屋を持っているか否かは地域別にも大きく異なった。

(5) 家庭での基本的な学習習慣に関しては、日本の児童・生徒は予想外に計画的でなく、予想外に基本的な勉強習慣が身につけてい

ない。そして、この傾向は学年が上がるほど顕著になる。

(6) 中学生の家庭での勉強の中心は学校の宿題で89.9%、それにつづくのが学校の授業の復習で46.3%であった。そして、高校生では55.1%が学校の授業の予習をあげているのに対して、中学生ではその割合は27.8%と3割に満たなかった。中学生は高校生と比べて予習の占める比重が小さい。

(7) 中学生の家庭での学習方法は、4分の3が自分はこつこつ型ではないと答え、3分の2が問題集中心であり、また、6割が暗記中心であると答えている。そして、用いることの多い教材は、なんといっても問題集であり、成績上位者ほどこの傾向が強い。

● 学校での学習と関連して

(8) 学校では、授業中の小さな逸脱行為(授業への不参加)が頻繁に起きている。しかし、児童・生徒はやるべきことはきちんとやっている。⑩黒板に書かれたことをきちんとノートに書くが、小学5年生で82.8%、中学2年生では95.0%、高校2年生でも91.1%もいる。さらにまた、⑪黒板に書かれていなくても先生の話で大切なことはノートに書くと答えた者も、小学5年生で4割弱、中学2年生で5割弱、高校2年生では6割弱にまで達している。

(9) 因子分析の結果、小学生の授業中の学習行動は、「自発的学習」、「注意散漫」、「参加」、「難易度」の4つの因子で構造的にとらえることができた。そして、自発的学習因子を特徴づけている質問項目に対して「よく(時々)ある」と答えた児童は、授業でわからないことはあとで先生に質問するで26.0%、自分から手をあげて質問したり意見を言うで39.0%、授業を聞いていて勉強のことに興味がわくで37.5%であった。小学5年生は、自発的学習に関連する各項目で3割弱から4割

弱の割合で積極的である。

(10) 注意散漫因子との関連では、日本の小学生は注意が散漫になりがちである。参加因子との関連では、いずれの項目でも女子のほうが男子よりも「よく(時々)ある」と答える割合が高い。小学生では、女子のほうが積極的に授業に参加している。最後に、難易度因子と関連の深い項目では、授業の内容が難しいと思うが41.5%、授業の内容が簡単すぎると思うが27.5%であった。単純に計算すると、小学生の69.0%が授業の難易度を自分には不適切であると考えていることになる。

●学校外学習機関と関連して

(11) 64.4%の児童が1つ以上の授業や中学受験と関係のある学校外教育機関を利用していた。3分の2近くの小学生にとって、小学校の授業だけでは小学校の授業や中学入試の受験勉強を十分にこなせなくなっているわけである。中学2年生では、その割合はさらに増え、75.5%が1つ以上の機関を利用していた。

(12) 学年別×成績別に学校外教育機関の利用状況を見ると、小学5年生では、学習塾や予備校、家庭学習教材で成績が上位の児童ほど利用率が高い。家庭教師では、わずかではあるが、成績が下位の児童ほど利用率が高い。家庭教師は、成績上位者に対するエリート教育というよりは、成績下位者に対する学校教育の補償機能を果たしているようだ。中学2年生については、塾や予備校、通信教育も成績が上位の生徒ほど利用率が高い。また、ここでも家庭教師は成績下位の生徒ほど利用率が高い。

(13) 学習塾や予備校へ通うか否かは自分の住んでいる地域の教育事情によるところが大きい。小学生では、東北(地方・郡部)がもっとも少なく19.0%、四国(県庁所在地)は31.3%、そして東京では51.0%が学習塾に通っている。東京では進学目的での塾通いが多い。中学2年生の学習塾・予備校利用状況も地域ごとに同様な大きな差異が見られた。

(14) 中学受験と学習塾の関係を見ると、受験を希望する児童のなんと66.4%が、小学5年生の段階から学習塾に通い、さらにそのうちの74.0%は進学塾に通っている。通塾日数や塾での学習時間も受験希望者ではハードになっている。

(15) おけいこや学校外のクラブについては、利用率の高い順に、④スポーツ(水泳、剣道、柔道、野球、サッカーなど)が43.5%、②習字が31.4%、①音楽(ピアノ、バイオリン、エレクトーンなど)が27.0%、③そろばんが17.5%であった。そして、⑧何もしていない児童は16.9%だけであった。小学生の間では、おけいこや学校外のクラブはほとんど当たり前になっている。

●日常生活の中での学習と関連して

(16) 日本の児童・生徒は学年が上がるほど、遊びや家の手伝い、読書などの幅広い意味での学習行動が減っていく。ただし、家族と政治のことについて話すや新聞のニュース欄を読む、テレビで日本や世界の生活・社会を紹介する番組を見るなどの、家族との会話やマスコミとの接触に関係する各項目では、学年が高くなるほど増加している。また、中学生の場合、成績別の差異が少ないのが特徴である。

(17) 小学生を対象とした因子分析の結果、われわれは小学生自身の視点に立って、日常生活の中での学習を構造化する「家族との会話」、「自発的学習」、「身辺自立」、「戸外生活」の4つの因子を得ることができた。

(18) 小学生の場合、家族との会話を通しての学習はあまりされていない。自発的学習を特徴づけている質問項目に関しては、知りたいことを自分で百科事典や図鑑で調べるが44.7%、本を読んでいてわからない言葉を国語辞典で引くが52.7%、地域の図書館で本を読んだり借りたりするが43.5%と4割台から5割台の値を示している。小学生たちは、家族の会話を通しての学習の場合と比べて、よく自発的に学習しているといえる。身辺自立につ

いては、世間で言われているよりは身辺自立が進んでいる。なお、性別には、家族との会話、自発的学習、身辺自立の3つは女子のほうがおむね高い値を示している。言い換えるならば、女子のほうがよく日常生活の中で学習をしている。しかし、戸外生活に関しては虫取りや観察、戸外での遊びの両者とも、男子のほうがよく学習している。

(19) 成績別には、成績上位の児童のほうが下位の児童よりも家族との会話や自発的学習を通しての学習を頻繁に行っている。身辺自立的な行為を通しての学習も部分的には成績上位の児童のほうが頻繁に行っている。しかし、戸外生活を通しての学習は成績ごとの差異がほとんどない。

(20) 日常生活の中での学習と教科の好き嫌いとの関係は、家族との会話や自発的学習との間には正の相関が見られる。身辺自立や戸外生活との間には一部の項目について正の相関が見られる。こうした結果は、一般に言われている「日常の生活の豊かさが学校での教科の学習の助けになる」という仮説を、学習のレディネスという側面から支持するものである。

●精神的・肉体的疲労と関連して

(21) 子どもたちは小学生の段階から、あくびがでるか78.5%、目が疲れるが64.1%、だるいが57.0%、いらいらするが56.3%などの精神的・肉体的疲労を訴えている。しかも、その割合は学年を追うごとに増える。日本の児童・生徒はとて疲れている。

(22) 中学受験と精神的・肉体的疲労の関係は、予想に反して、両者の間には有意な差を見出せなかった。また、中学生の運動部と精神的・肉体的疲労との関係も、運動部員とそ

れ以外の生徒との間には、差異がないかあるいは逆にそれ以外の生徒のほうがあくびがでる、あきっぽいと訴える割合が多くなっている。運動部員が他の生徒よりも疲労しているだろうという予想は過ちであった。

さてこの章で明らかになったことを整理すると、以上の通りであった。最後に、これらの知見をもとに3つほど指摘しておきたい。

第一に、日本の児童・生徒が家庭での基本的な学習習慣が十分に身につけていないこと、計画性がないことは意外であった。しかし、考えてみれば学校化された社会の中で、児童・生徒が家庭の中まで規則や計画に忠実に生きていたのでは面白味というものがない。そういう意味ではこんなものでいいのかもしれない。

第二に、同様なことは、学校での学習で、一方で児童・生徒が注意散漫になったかと思うと他方でノートをきちんととって授業に参加するなど、教室での過ごし方を適当に組み合わせていることに関しても言えるのではないだろうか。こうした視点から見ると、クラスルーム・ストラテジー(教室での戦略)を使いこなしている日本の子どもたちが実にたくましく思えてくる。

第三に、日常生活の中での学習の分析の中で、今回は事典や図鑑で調べる、辞書を引く、図書館を利用するなどの項目で自発的学習を検討した。そして、日本の児童・生徒がわりと自発的であることがわかった。今後の研究では、自分で遊びの道具や身の回りのものを工夫することであるとか、友だちや家族との関係を自分から作っていくであるとかに関連した自発的学習にも目を向ける必要がある。